

殺めたり  
殺人者

當犯罪者

石田郁夫



はみだした殺人者

並犯罪

石田郁夫



石田郁夫（いしだ・いくお）

1933年 東京都伊豆大島に生まれる

1953年 都立大島高校卒業

現 在 新日本文学会会員

著 書 『新島』（未来社）

『創価学会』（三一書房）

『大衆運動の病理と論理』（晶文社）

『沖縄・この現実』（三一書房）

『安保・反戦・沖縄』（三一書房）

『弧状列島の底点から』（三一書房）

『沖縄・辺区からの逆攻』（田畑書店）

『土俗と解放』（社会評論社）他

## はみだした殺人者

1979年 7 月 25 日 第1版第1刷発行

著 者 石 田 郁 夫

© 1979 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 株式会社 厚 徳 社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1～5 番

振 替 東 京 9—8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

はみだした殺人者——当世犯罪巷談

目次

1 千葉栄町トルコ殺人  
房州・因果噺

5

2 はぐれ娼婦の横死  
上州・春婦伝

25

3 元坑夫の後家殺し  
筑豊・頼母子講

45

4 名家の娘の高利貸殺し  
越中・貞女鑑

69

5 連統老爺殺人事件  
玄海・漂民譚

89

6 夫婦交換殺人事件  
伊予・とりかえばや物語

113

7 キツネつき息子殺し  
津軽・狐草紙 133

8 姐御リンチ殺人事件  
尾張・悪妻録 155

9 元検事の銀行襲撃  
琉球・世替り異聞 175

10 娘殺しと自死  
多教育の殺人考 197

あとがき 209

装帧  
渡辺千尋

1

千葉栄町  
トルコ殺人

房州・因果噺

千葉市栄町のトルコ街にほどかい連れこみホテルを定宿にしていた、その女は、つましい地味なくらしぶりだった。

トルコで働く女にしては、化粧もうすく、色が浅黒く、背がひくく、ひつつめ髪で意志的なアゴのあたりをこわばらせると三十女のような世帯じみた表情が浮き出てくるようだった。

女中たちには、しばしば買物などを依頼したが、十円のおつりもきちんとして受けとり、女中たちにチップをやることなどは、こんりんざいなく、ただ、くちやかましく注文をつけるだけだった。室の冷蔵庫のジュースのたぐいも、一度たりと手をつけず、肌身はなさず持っている、一万円札がぎっしりつまっている、ぶあついサイフから二千数百円の宿泊料を日割で払っては、午後、タクシーで出勤し、未明に帰ってきた。三月はじめに、この宿へトランクさげてやってきて、住みついてから半月以上もたつのに、男からの電話ひとつなかった。

ヒモに寄生されることもなく、自前で、ひたすらためこんでいるかのような、この「身持の堅い」女は、水商売の裏表を熟知している女中たちにとっては、小面憎いほどの理想像に見えたので、やかみ半分の好奇心に満ちたまなざしで観察されることになった。

チビでスタイルも悪く、ブスですらある。口は出すが金は出さず、ジュース一本のむでもなく、化粧にすら金をかけない。それに年喰ってもいそいで、「あれでよくトルコがつとまるものだ」と、陰

口をたたきながら、ホテルで働く女たちは羨望し、せんさくした。室の掃除に訪れた女中が、商売の資金稼ぎでもしているのかと、サグリを入れたことがあった。女は、自分は元は看護婦であり、兄はいま東京で、医学博士になるための勉強をつづけていると、兄の学資を助けるためのトルコづとめであることを、におわせる口吻で、ポツリと身の上を語った。

それから大真面目で、ナイチンゲールが私の理想だった。白衣の天使になって人々に奉仕することこそが生きがいだと、少女の頃は考えていた。その夢は、いま兄に託して、私は、せっせとトルコ稼業でかせいでいると語りついだ。夜勤あけの婦長のように、はれぼったいまぶたを、連れこみホテルのホコリを照らす午後の陽ざしにむけての、この身の上ばなしは、女中をえらく興がらせた。

「看護婦も、みためはいいが、仕事のきついわりに金にはならないから」と、あいづちをうってみせながら、女中は腹の底では、たっぷり嘲笑した。白衣の天使からトルコの天使になって、博愛衆におよぼして、男どもを天国におくっているなんざあ、できすぎた冗談だ。嘘をほんとはしくする努力も惜しむほどしまり屋だよ、この女は。まったく底知れないケチだ。

医学を志す兄に入れあげるといふ設定は、まったくの虚構だったが、看護婦だったことは事実だった。

昭和四十一年、中学を卒業した彼女は、郷里の、北海道は夕張の准看護学院に入学した。彼女の父は、北炭夕張炭鉱の坑夫だった。四人きょうだいで娘はひとり、可愛がる父に甘えるように語るのが、大きくなったら白衣の天使になって、世のため人のためにつくすという夢だった。

宿願の看護学院に入ると、年来の夢がかなえられた気負いから、大いに積極的になるまい、同輩た

ちに派手すぎると非難されるほど勝気で活発だった。四十三年に卒業し、あこがれの都市、札幌に出て、市内の病院に就職した。勤勉で、いきいきした、上司や患者に愛される看護婦だった。夕張の炭住ではぐくんできた少女の夢が成就し日々仕事がたのしくてならないといった、みずみずしい看護婦ぶりではあった。

しかし、一年とは持続しきれなかった。春に就職し、その秋には、彼女の人々につくしたいという念願は、特定の男にしぼられるという転移をとげた。世に病む多くの患者の白衣の天使から、恋人に入れあげる、ただの女と化したのだ。入院患者の一人に、ぞっこん惚れてしまったわけだが、その男は、札幌の暴力団のチンピラだった。

炭鉱からマチに出てきた少女をたらしこむのは、このチンピラにとっては、きわめてたやすいことだったにちがいない。病院ぐらしで時間はたっぷりあるし、機会もまたふんだんにある。介抱される患者という弱者の立場で、まだ新鮮な奉仕欲をみなぎらせている少女につけるには、手数はいらない。とことん甘ったれて博愛精神をくすぐるだけでいい。病院のベッドで訴えている身が、病院の外で受け身から一転して押さえこむだけで、患者はヒモに成りあがった。

このチンピラの退院後、天使から情婦に、少女はひたむきに急転直下する。無断欠勤、外泊、みるみるうちに変貌して、彼女は翌、四十四年の春には、病院には無断で退職してしまった。

家には、遠方に行くという伝言があったのみで、札幌から行方知れずとなってしまった。愛人である、組のチンピラに売りどばされたという風評のみが、いつとき、のこったが、やがてすぐ忘れられていった。その後の彼女のたどった行程は、さだかではないが、総武線の沿線のトルコに出現し、稀

毛では「アケミ」と名のり、中山では「都」と称し、柴町では「琴」という。源氏名をもつ、トラ  
ンク片手に仮寝の宿を転々する、いっぱしのトルコ娘になっていた。

柴町にうつるまでは、札幌の男が、ちよくちよく現われ、ヒモとして一貫したつながりがあった形  
跡があった。

郷里の家には今年（四十七年）には札幌で喫茶店をひらく計画を持っていて、そのために資金をた  
めているというたよりがあった。

その日、三月二十二日出勤するさい、フロントに宿賃をはらいながら、彼女は、つねになくサイフ  
から一万円札をとり出して数えはじめた。六十万円まで一枚一枚数えて、バッグに入れかえた。フロ  
ントの係の女が、現金を持ち歩いて危なくはないのか銀行にあずけたいらと、口をはさむと、夕方  
出かけて未明に帰るので、銀行に出かける間がないから持ち歩いているほかないのだと言いつて、  
浮かぬ顔で出ていった。

柴町のトルコ「桃山」の「伊香保の間」が、彼女の職場だった。職場にいつでも彼女の表情はさえ  
なかった。同僚が問いかけると、虎の子の六十万円を、ある人に貸してしまつたと、不機嫌の理由を  
明かした。やがて客が立てこんできた。「伊香保の間」の「琴」さんもまた、平常の職務についてた。

千葉市の郊外、四街道は、かつて砲兵連隊がいたことで知られている田舎だが、御多分にもれず、  
新開の工場地帯となつていた。そのての工場のひとつ、内外建設は、三月二十二日が給料日だった。

その会社の製罐工で、組長補佐の山田清（二十九歳）は、寮費を差引かれた、手取り四万すこしの給料

袋を懷中にして、その夜、まず、いきつけの四街道の小料理屋に顔を出した。

真面目で、タバコを吸わず、競馬、競輪などはふりむきもせず、パチンコもはじかず、仕事一方の男だった。酒だけは、かなりいけたが、それもいくらか陽気になって歌をうたうという、いい酒のみで、多少、ハシゴの癖があるといった程度の堅物だと会社の同僚たちは考えていた。

彼も北海道の炭鉱街の出身だった。父親は赤平鉱の炭鉱夫で、彼も中学を出てから炭鉱関連の会社を転々と渡り歩いてから、坑外夫として炭鉱で働いたこともあった。閉山後、兄が働いていた赤平に本社を持つ、炭鉱離職者が多く勤務している内外建設に四十四年に就職し、四十五年、兄とともに千葉営業所に転勤してきた。

炭住にいた頃、池に落ちた子供二人を助けて、人命救助で表彰されたことがあり、彼のまじめさをものがたるエピソードとして郷里の人たちには記憶されていた。内外建設に就職する前に、一度結婚したことがあったが、この嫁との折合いが悪く、二カ月で離婚し、それからこっち、女っけはなかった。離婚の原因は、嫁が浪費家であったが上に、とつぐ前からの恋人を思いきれず、彼との性関係を拒みぬいたという説があるが、さだかではない。

ともかく、一度しくじったせいもあって、女性に関して消極的になってしまっていたことはたしかだった。女によらず、すべてに小心律義であることはまちがいがなかった。いきつけの料理屋も、秋田の郷土料理を売りものにしてるところから、ある種の北海道との親近性を覚えて入ってみて、なじみになったというわけだった。しかし、おしんこで二、三本飲み、その都度はい、興がのれば、また二、三本飲んで、知床旅情などを、さびしくうたうというあんばいで、陰気だった。

その夜も一人でポツンと入ってきて、店のものたちが誰も知らない北海道の、さびしげな歌を陰々滅々とうたったあと、ションボリ出ていった。寮に帰らないで、もう一軒、のれんをくぐった。かなりできあがって、今度は威勢よく街道へ出てきた。帰路につきはじめたとき、うしろから市内へ帰るタクシーの空車がやってきた。つい反射的に手をあげた。柴町で下車すると、おにぎり屋へ入って、また飲みはじめた。

トルコ帰りで、酔いもさめはて、ものたらなだけが、いよいよこみあげてくるような心境のとき、首をもたげてくる散財の後悔をふりはらうための、酒を流しこむために、彼はときどきここへ寄ってから寮へ帰ることがあった。

ふんざりわるく飲みつづけているうちに、つとめを終えたトルコの女たちが、この店に未明の食事をとりにつめかけてきたのに出くわしたこともあった。外車で乗りつけてきて、ヒモ達と談笑したりしている女たちのなかで、隅でちぢこまり、オシンコで呑んでいる彼に、サカナをふるまってくれる女もいた。年に数度、なけなしの給料をはたいての散財に、心を痛めている「客」であった男は、氣押されて、うつむくのみだった。

三軒めのハシゴで、ようやく高揚してきた男は、かつての屈辱感などは、すっかりうち忘れてしまい、気が大きくなってきた。懷中にはまだ余裕がある。店を出ると路地をつたって、何度かいったところのある「角海老」というトルコに入っていた。客が立てこんでいた。もう少し飲んで、時間を見はからってからにすることにした。男はバーへ入った。

男が路地に出てきたとき、懷中からは最初の店から合計して三万数千円が消えていた。もはや、や

けくそだった。「桃山」にくりこんで、「伊香保の間」にあがった。

入浴料千五百円、サービス料五百円、男の懐中には五千円札一枚と千円札一枚、それに小銭しかのこらなかった。もう二十三日の午前三時ちかくになっていた。

あけがたの五時ちかくになっても、「伊香保の間」から客も女も出てこなかった。

入ってから二時間以上たっている。従業員が室へ入ってみた。マッサージ台の上に絞殺死体があった。客はいなかった。客の下着やワイシャツはあったが、洋服はなかった。マッサージ台の下に千円札一枚落ちていた。死顔はやさしかった。享年二十一歳の、まだ、あどけなさののこる地肌に、強いてくまどった営業用の顔料が浮き出て、仮面の下で素顔がむき出されたといった感じだった。絞殺された死体にありがちな吐瀉物もなく、口は、吐息をつくように、すぼめてあけられ、安らかな表情ですらあった。

それ自体、すでに検死のためにしつらえられた台のような、そっけないマッサージ台の上に、彼女は、あおむけに寝ていた。お仕着せのタテジマのブラジャーが乳首のさきに、もつれるようにひっかかっているのみで、あとは全裸だった。

客は、ワイシャツのネームから、すぐ割り出された。午後三時には宿酔いだといって会社を休んでいた山田は逮捕された。

堅物がトルコへ遊びに行ったということですらびつくりすることなのに、しかも殺人をしたというので、彼の日常を知る会社の連中は啞然とした。人ちがいだと信じた。まぎれもなく彼の犯行だとい

うことが確認されると、自らのトルコ体験をふまえて、被害者性悪女説しょうわるをとなえるものもいた。

まじめ男もハシゴ酒で分別を失い、魔がさした。自分もまた、れっきとした男である、他人のたのしむトルコというものを試みてみよう、そんなつもりで、酒の力をかりて、思いきってくりこんでみた。女は当然、手練手くだをろうして、ホンバンへと誘った。彼もまた木石ではないので、その氣になった。しかし、いざというときになって、性来の堅物性をとりもどし、やらないで帰ろうとした。そうしたら女が、短小の、インポの、甲斐性なしの、安月給とりの、けちんぼのと、思うさま侮辱した。そこで、氣のよい、おとなしい彼も、憤然として、その悪口雑言のかぎりをつくす口にくたをしようとして手をかけた。動転していたので力が入ってしまい、氣がついたら死んでいた。悪いのはトルコであり、その女だ、考えてみれば、彼の方が被害者みたいなものではないか。

だが、事実は、その好意的な推測とは、かなりちがっていた。

彼は、おりおりトルコをたしなんでいた。ハシゴ酒の度をすごして、氣宇壮大になったときのみだったが、一夜で給料すべてをはたくという破滅型ハシゴの仕上げとして、トルコへ突入するというコースを千鳥足でのぼりつめるという快味を、すでに幾度もむさぼっている。他に趣味をもたず、友人もない彼の唯一の生き甲斐が、それだったと思われるフシがある。

量ではなく、彼の生きざまにおける質としてみれば、それだけしかないという点で、たいへんなトルコ道楽だと見ることもできる。いつもの「角海老」が、おりあしく満杯で、時間待ちでバーへくりこみ、所持金をとぼしくしたことが、破綻につながった。

三万数千円を、道草喰ってはいってしまった一件は、いささか酔いもさめるほどの苦りを彼の心に

与えた。飯は寮で喰えるし、タバコ銭もいらぬ彼にしても、翌月の給料日まで一文なしですぐすという現実には、暗然とするに足る。残りの数千円を握りしめて寮に帰って寝てしまえばいいわけだが、なんのために三万数千円を、それまでに消費してきたか意味がなくなる。トルコへくりこむための、準備運動の費用だった。そのまま帰れば、まったくの死金になる。いっそ、そのまま、トルコに直行した方が、安上りだったわけだが、ハシゴをしないとその気にならない。

屈託をかかえながら、ともかく彼は「伊香保の間」に入った。「六十万円を誰かに貸した」浮かぬ想いの琴女とのあいだに、短いやりとりがあった。本番代七千円を五千元にするという交渉だ。

話がついて、五千円札は彼女のバッグにおさまった。この日、彼女はこれで四万円ちかく稼いだ。一夜で月給四万円をつかいた男と、日銭四万の水あげをあげた女は、マッサージ台の上で重なった。

この無口な男と女は、おたがい北海道の炭鉱育ちであることは知らなかった。元夕張鉱の娘と、元赤平鉱の息子が、千葉は栄町のトルコ「桃山」の「伊香保の間」で、つかのま交錯した。

男も女も心労をかかえて疲れはてていた。棒のようにどたりと横たわっている女は、いかなる禁忌か、ブラジャーをとろうとしなかった。きわめて実務的に男の欲望の処理をはかるといった態度だった。入浴して、酔いもさめかけてきた男は、懷中のうつろから吹きよせてくる無常の風に滅入りがちで、飲んだ酒の酔いは、もっぱら股間に集中してくる感じで、一向に終らなかつた。すでに三時三十分になっていた。女は時間延長分として千円、追加することを要求した。

従順に女の上から下りた男は、ロッカーをあけて、服のポケットをさぐった。帰りのタクシー代に